

「不動産取引市場調査」（2017年上期）の結果概要

日本不動産研究所は、不動産取引市場調査（2001年上期～2017年上期）を実施いたしましたので、調査結果の概要を公表いたします。

1. データベースについて

(1) データベースの構築

J-REIT、東京証券取引所、日経不動産マーケット情報等の公表事例を独自に集計。2001年上期～2017年上期までで、約22,600件の取引事例を収集し、データベースを構築しております。

(2) データベースの特徴

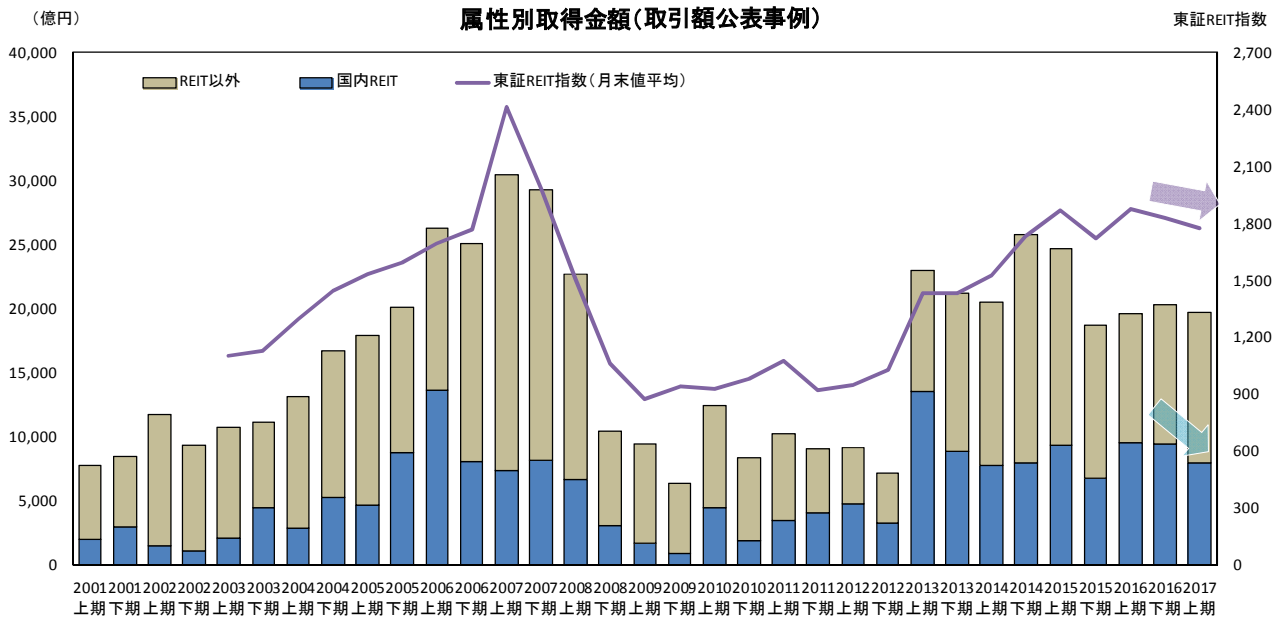
本データベースでカバーされるのは、主として都市圏を中心とした投資用不動産の取引であり、アセット別や、取引主体別、地域別等の分析が可能です。

(3) その他

- ・ 上期は1～6月、下期は7～12月としています。
- ・ 2～3月、8～9月頃を目処に、半期ごとにデータの更新を行います。

(3) 取引主体について

不動産取引市場における 2001 年以降の売買主体別買越・売越状況を見ると、REIT の買越が目立つ。特にリーマンショック以降は、唯一買越しを続けるプレイヤーとしてその存在感が増している。ひとたび、REIT が不動産を取得すると、売却を行うケースは限定されることから、REIT への物件集約が、昨今の不動産取引市場での「モノ不足感」を生み出す要因の一つになっている。しかしながら、2017 年上期は REIT の取得金額が減少している。外資系プレイヤー等が再び勢いを増すなかで、スポンサーからの取引量の減少・東証 REIT 指数の低迷もあり、REIT にとっては厳しい取得環境が続いている。



(4) 外資系プレイヤーの動向について

外資系プレイヤーの買越額は、2007 年上期に約 7,000 億円に達しピークを迎え、当時国内不動産取引市場を席卷した。一方で、政権交代を経た 2013 年上期以降を見ると、2014 年下期～2015 年上期では、外資系プレイヤーの取得金額が 4,000 億円～6,000 億円に膨らんだものの、売却金額も増加しており、売り買いほぼトントンの状態であった。過去の例では、外資系プレイヤーの取得金額は為替動向と連動するような動きをみせている。2016 年下期のトランプ政権誕生以降、円安トレンドへの転換とともに、外資系プレイヤーの取得金額も反転。2017 年上期は外資系プレイヤーの取得金額が増加し、僅かながらも買越に転じた。2017 年下期以降も、外資系プレイヤーによる活発な売買が行われていることから、引き続きその動向が注目される。

※詳細データについては非開示とさせていただきます。詳細についてご関心がある方は、下記「お問い合わせ先」まで、ご連絡ください。

3. 留意事項

- ①本調査は有償でご提供している業務です。詳細についてご関心がある方は、お問い合わせ先までご連絡下さい。
- ②本資料の基礎となるデータ等については、情報開示後の追加・変更等に基づいて適宜更新しており、過去または、将来の公表値と相違する場合がございます。
- ③本資料において行った分析結果等は、弊社の注意義務の範囲内において入手可能な資料に基づいて行ったものですが、調査の時点における判断を示したものであり、実際の取引価格等及び将来において成立する取引価格・賃料成約水準等を保証するものではありません。また、経済環境の変化や不動産市況の変化、基礎となるデータ等の更新に伴い、過去に遡り今後予告なしに変更される場合がございます。

[お問い合わせ先]

一般財団法人 日本不動産研究所
金融ソリューション部 市況モニタリング室
(MAIL) JREI-kinyu-madoguchi@imail.jrei.jp
(TEL) 03-3503-5363

以上

■本資料の記載内容（図表、文章を含む一切の情報）の著作権を含む一切の権利は一般財団法人日本不動産研究所に属します。また記載内容の全部又は一部について、許可なく使用、転載、複製、再配布、再出版等を行うことはできません。

■本資料は作成時点で、日本不動産研究所が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任を負うものではなく、今後の見通し、予測等は将来を保証するものではありません。また、本資料の内容は予告なく変更される場合があり、本資料の内容に起因するいかなる損害や損失についても当研究所は責任を負いません。